

朝鮮の歴史(史実編) Ver.2 '20.1.11

主な参考文献: 下記から多くを引用させていただきました

- ①「朝鮮の歴史」(井野誠一 監修) KKベストセラーズ発行
- ②「Wikipedia」 <https://ja.wikipedia...>
- ③「百済世界遺産センターHP」 <http://www.baekje-heritage.or.kr/...>
- ④「駐横浜大韓民国総領事館HP」 <http://overseas.mofa.go.kr/...>



<新羅の建国>
 新羅の建国は三国(新羅、百済、高句麗)の中で一番早いBC57とされている。ただしこの頃の歴史は伝説か史実かが明確ではなく、もっと遅いという説もある。新羅は長年にわたり高句麗・百済と抗争し、日本とも関係が深かった。668年までに百済、高句麗を滅ぼし、さらに朝鮮半島支配を狙った唐軍を676年に撃退し、半島の大同江以南を統一して「統一新羅」とし、935年に高麗に代わるまで続いた。(参考文献②より)

<伽耶とは>
 伽耶(かや)は、3世紀から6世紀中頃にかけて朝鮮半島の南部に存在していた小国家群であり、12以上の小国で構成されていた。562年に新羅に滅ぼされるまで500年以上続いた。(参考文献②より)

<百済の建国>
 百済は、韓国の古代国家の一つで、紀元前18年の建国から660年の滅亡まで約700年間31人の王が在位した。建国当初は漢江(今のソウル)の中下流に位置する小国だったが、次第に周辺の小国を併合して成長した。(参考文献③より)
 建国のいきさつは明確な史実としては伝えられていないが、高句麗を建国したチュモンの息子で2代王となる瑠璃(ユリ)が王妃ソノの実子でなかったことから後継者争いが起こり、王妃が二人の息子と臣下を連れて南下し、百済を建国したという説もある。(参考文献①P47)

<高句麗の建国>
 高句麗は紀元前37年の建国から668年の崩壊に至るまで705年間繁栄した国である。建国の時代は朝鮮半島は扶余をはじめ多くの小国が存在する群雄割拠の時代であった。そんな中、扶余国の出身の青年朱蒙(チュモン)が彼を慕う難民たちと共に扶余を出て高句麗を建国したとされている。チュモンは強いリーダーシップと軍力を発揮し、小国を一つずつ併合する拡大策をとり、近隣の小国を征服して1世紀初頭には扶余を凌駕するほどの強国となった。(参考文献④より)
 高句麗を建国したチュモンの出自や建国までのいきさつは、ほとんど神話の世界であり、正確な史料は残っていない。「三国史記」ではチュモンはハベク(中国の河の神)の娘ソファが生んだ金の卵から誕生し、彼女を保護した扶余のクムワ王の下で王子として育てられたと記されている。(参考文献①P47)

<扶余とは>
 ツングース系の部族「貊人(はくじん)」が、紀元前2世紀ごろ中国東北部の松花江中流に建てた国であり、1~3世紀ごろには高句麗に対抗する勢力となった。494年に同じツングース系の部族「勿吉(モッキソ)」に滅ぼされた(参考文献②より)

<高麗と扶余の戦い>
 高句麗を建国した朱蒙(チュモン)は扶余の王子(クムワ王の養子で3男)であったが、その後扶余と長く戦うことになった。これは兄(クムワ王の長男)の帯素(テソ)が早くからチュモンをライバル視して殺そうとしたこともあった仲であったことによると考えられる。チュモンが40歳の若さで亡くなった後、テソが扶余の王となり高句麗への侵攻を試みた。高句麗2代王の瑠璃明(類利 ユリ)は何とか持ちこたえたが度々脅威に晒された。その状態を打開したのが高句麗3代王となった大武神(無恤 ムヒュル)であった。ムヒュルは優れた武勇と戦略で扶余に侵攻し、祖父チュモンの代からの宿敵であったテソ王の首を取った。(参考文献①P27他)

日本の時代	西暦	新羅	百済	高句麗	扶余	伽耶
弥生時代	-60	新羅				
	-50					
	-40	BC57~AD4 1代_朴赫居世 (ヒョッコセ・ゴソガン)		BC37~BC19 1代_東明聖王(朱蒙 チュモン)		
	-30					
	-20					
	-10					
	0	4~24 2代_南解次次雄 (ナメ・チャチャウン)		BC19~AD18 2代_瑠璃明王(類利 ユリ)		
	10			18~44 3代_大武神王(無恤 ムヒュル)		
	20	24~57 3代_儒理尼師今 (ユリイ・サグム)				
	30					
	40					
	50					
57 倭奴国王、 後漢に遣使	60	57~80 4代_脱解尼師今 (タルヘ・イサグム)	BC18~AD2 1代_温祚王(オンジョワン)	44~48 4代_閔中王		
	70		28~77 2代_多婁王(タルワン)	48~53 5代_慕本王		
	80	80~112 5代_婆娑尼師今 (ハサ・イサグム)				
	90					
	100		77~128 3代_己婁王(キルワン)	53~146 6代_国祖王		

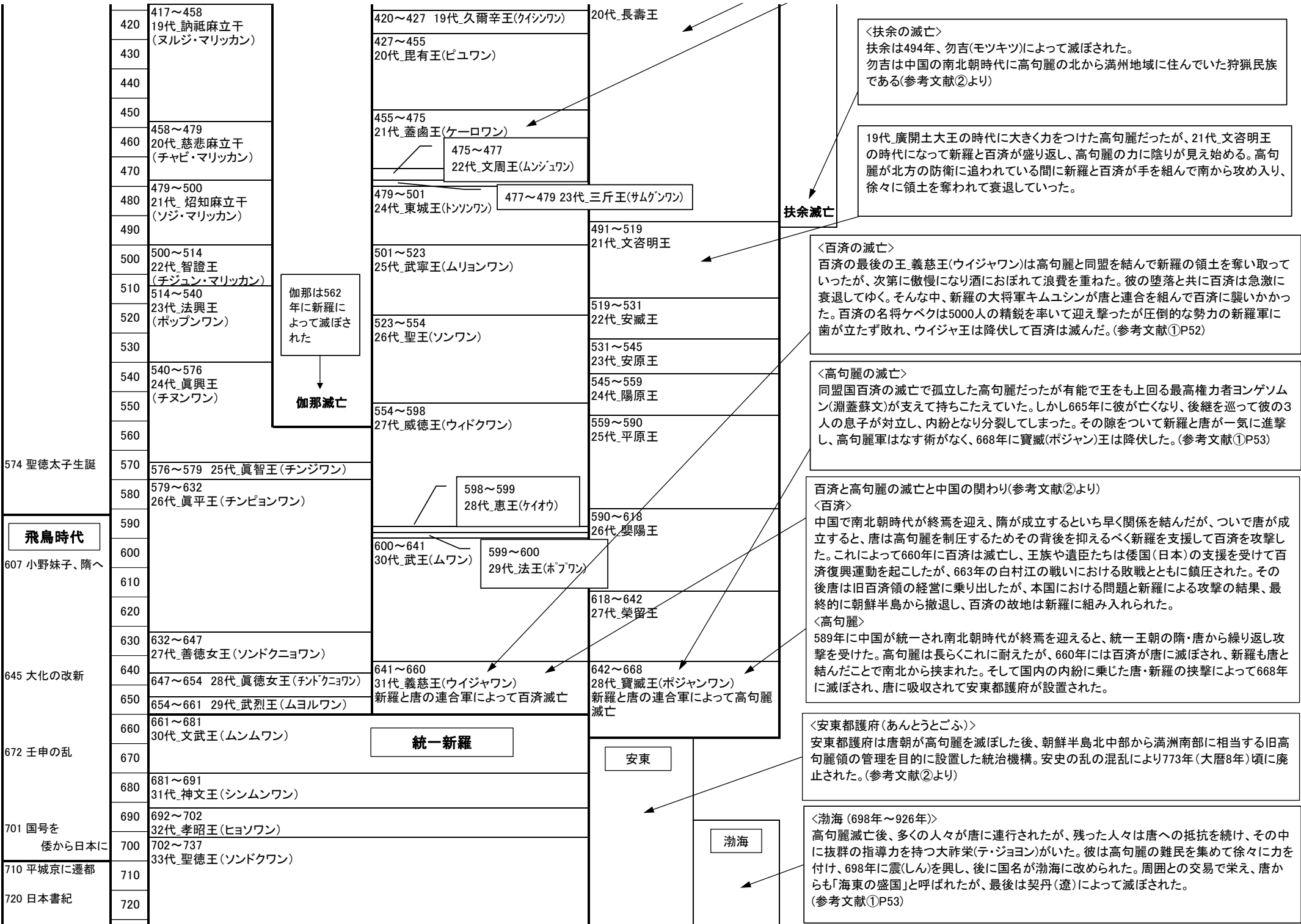
107 倭国王、 後漢に遣使	110	112~134 6代_祗摩尼師今 (チマ・イサグム)
	120	
	130	134~154 7代_逸聖泥師今 (イルソン・イサグム)
	140	
	150	154~184 8代_阿達羅尼師今 (アダルラ・イサグム)
	160	
	170	
	180	184~196 9代_伐休泥師今 (ボルヒユ・イサグム)
	190	
	200	196~230 10代_奈解泥師今 (ネヘ・イサグム)
210		
220		
239 卑弥呼が 魏に遣使	230	230~247 11代_助貢尼師今 (チョブン・イサグム)
	240	
	250	247~261 12代_沾解泥師今 (チョムヘ・イサグム)
	260	262~284 13代_味鄒泥師今 (ミチュ・イサグム)
	270	
	280	284~298 14代_儒禮泥師今 (ユリエ・イサグム)
	290	
	300	298~310 15代_基臨泥師今 (キリム・イサグム)
	310	310~356 16代_訖解泥師今 (フルヘ・イサグム)
	320	
古墳時代	330	
	340	
	350	356~402 17代_奈勿麻立干 (ネムル・イサグム)
	360	
	370	
	380	
	390	
	400	402~417 18代_實聖麻立干 (シルソン・イサグム)
	410	

128~166 4代_蓋婁王(ケルワン)	
146~165 7代_次大王	
166~214 5代_肖古王(チョゴワン)	165~179 8代_新大王
	179~197 9代_故國川王
	197~227 10代_山上王
214~234 6代_仇首王(クスワン)	
234~234 7代_沙伴王(サハンワン)	227~248 11代_東川王
234~286 8代_古爾王(コイワン)	
	248~270 12代_中川王
	270~292 13代_西川王
286~298 9代_責稽王(チェッキェワン)	292~300 14代_烽上王
298~304 10代_汾西王(ブンソワン)	300~331 15代_美川王
304~344 11代_比流王(ピリュワン)	
344~346 12代_契王(キェワン)	331~371 16代_故國原王
346~375 13代_近肖古王(クンチョゴワン)	
384~385 15代_枕流王(テムニユワン)	
375~384 14代_近仇首王(ククスワン)	371~384 17代_小獸林王
	384~391 18代_故國壤王
392~405 17代_阿華王(アシワン)	385~392 16代_辰斯王(チンサワン)
391~413 19代_廣開土大王	
405~420 18代_腆支王(チョンジワン)	
	413~491

〈百済の全盛期_13代_近肖古王の時代〉
高句麗と激しい領土争いを繰り返していた百済は13代王_近肖古王(クンチョゴワン)の時代に全盛期を迎える。346年に即位したクンチョゴは徹底した富国強兵策で371年に高句麗の故國原王(コグクオンワン)を破り建国以来最大の領土を獲得した。また彼は経済、文化、芸術面でも能力を発揮し、346年に日本に使者を送り交易をおこなったり、また朝鮮半島でいち早く漢字を取り入れ、百済の歴史書を編纂させたとの記録もある。
(参考文献①P46)

〈高句麗の全盛期〉
高句麗が最も力を持ち、領土を広げて朝鮮半島に対等な力を持った国が存在しなくなったのは第19代_廣開土王(クァンゲトワン)の時代であった彼はまず百済へ侵攻し、その後、契丹、肅慎、東扶余等を次々に討伐し、四方に領土を広げた。この頃の高句麗は強力な騎馬隊と優れた製鉄技術を持っており、これが高句麗躍進のポイントであった。(参考文献①P42)

〈百済と高句麗の対立〉
百済は長く高句麗と対立した。対立は、高句麗の広開土王が南進政策を推進したことから激しくなった。その後、高句麗の20代_長寿王が427年に平壤に遷都したことで、百済は直接的な脅威にさらされるようになる。この時期に百済第21代王の蓋鹵王(ケロワン)は、王族中心の支配体制の構築や大規模な土木工事を進めるなど、専制王権を目指していた。対外的には高句麗を牽制するために中国北魏との外交を試みた。しかし、蓋鹵王の政策は、内部的な分裂と高句麗の南侵を招いた。百済の首都だった漢城は、長寿王率いる高句麗軍によって7日で陥落し、蓋鹵王は戦死した。このとき、王のほかには王太后や王子なども殺され、8000人が捕虜になった。
(参考文献③より)



奈良時代	730	737~742	34代_孝成王(ヒョソンワン)			
	759 万葉集	740	742~765	35代_景德王(キョンドクワン)		
		750				
	760	765~780	36代_惠恭王(ヘゴンワン)			
	770					
平安時代	794 平安京に遷都	780	780~785	37代_宣徳王(ソンドクワン)		
		785	785~798	38代_元聖王(ウォンソンワン)		
	790		798~800	39代_昭聖王(ソソンワ)		
	800	800~809	40代_哀莊王(エジャンワン)			
	810	809~826	41代_憲徳王(ホンドクワン)			
	820	826~836	42代_興徳王(フンドクワン)	838~839	44代_閔哀王(ミネワン)	
	830		836~838	43代_僖康王		
	840	839~857	46代_文聖王(ムンソンワン)	839~839	45代_神武王	
	850	857~861	47代_憲安王(ホナンワン)			
	860	861~875	48代_景文王(キョンムンワン)			
	870	875~886	49代_憲康王(ホンガンワン)	886~887	50代_定康王(チョンガンワン)	
	880					
	887~897	51代_眞聖女王(チンソンニョワン)				
	890					
	897~912	52代_孝恭王(ヒョゴンワン)				
900		900~935	1代_甄萱(キョンフオン)	901~918	1代_弓裔(クンイエ)	
910						
913~917	53代_神徳王(シンドクワン)					
917~924	54代_景明王(キョンミンワン)					
920	924~927	55代_景哀王(キョンエワン)	935~936	2代_甄神剣(シンゴン)	918~943	1代_太祖(王建 ワン・ゴン)
927~935	56代_敬順王(キョンスンワン)					
930						
940						
943~945	2代_惠宗(王武)					
949~975	4代_光宗(王昭 ワン・ソ)					
950		945~949	3代_定宗(王堯)			
960						
970	975~981	5代_景宗(王佑)				

773年
安東都護府廃止

〈後百済・後高句麗の建国と後三国時代〉
9世紀末、三国を統一した新羅の国力が衰退すると地方の豪族が相次いで独立する。中でも西南海地方を領土にした甄萱(キョンフオン)と北部の弓裔(クンイエ)は周りの豪族たちを傘下に置き、勢力を拡大してそれぞれ後百済、後高句麗として独立を宣言。後三国時代を迎える。
キョンフオンが建国した後百済は強大な軍事を背景に一時は勢力を強めていったが、大耶城の戦いで新羅に惨敗してからは衰退していった。
一方、クンイエが建国した後高句麗は臣下の王建(ワンゴン)の活躍により北部一帯を支配下に置いた。ワンゴンはクンイエのもとで將軍として次々に各地の城を陥落させ、その遠征で地方の豪族達と姻戚関係を結び、彼らの支援を受けることに成功し、クンイエからも絶大な信頼を寄せられた。(参考文献①P62)



〈後高句麗の滅亡と高麗の建国、朝鮮半島統一〉
クンイエが建国した後高句麗は領土を拡大していったが、クンイエが次第に欲に取りつかれ、きらびやかに飾り、それを非難する高僧や王妃を惨殺するなどの非道に走り、建国に貢献した臣下の王建(ワンゴン)の反逆を疑うに至り、耐えかねたワンゴンは武將たちと協力してクンイエを倒して新しい国を建国(918年)し、王位に就いた。この新しい国は高句麗の魂を継ぐという意味を込めて「高麗」と名付けた。
その後、新羅、百済を滅ぼして朝鮮半島を再統一した。(参考文献①P63)

〈後百済の滅亡〉
935年に高麗に大敗した後百済のキョンフオン王の長男 神剣(シンゴン)は王位を継承できると考えたがキョンフオンが四男の金剛(クムガン)を指名した。怒ったシンゴンはクムガンを殺害し王のキョンフオンを幽閉し、王位を奪った。キョンフオンは脱出して高麗に亡命し、王位を奪ったシンゴンを討とうと高麗軍の一員として後百済と戦った。次第に士気が低下した後百済軍は降伏。キョンフオンはそれを見届けた後、数日後に亡くなった。こうしてキョンフオンは自分が建国した後百済を自らの手で葬った。(参考文献①P66)

女真は、満洲の松花江一帯から外興安嶺(スタノヴォイ山脈)以南の外満州にかけて居住していたツングース系民族。民族の聖地を長白山とする。10世紀ごろから記録に現れ、17世紀に「満洲」(マンジュ)と改称した。(参考文献②より)

遼は、遼朝ともいい、内モンゴルを中心に中国の北辺を支配した契丹人(キタイ人)耶律氏(ヤリュート氏)の征服王朝(異民族王朝)で916年から1125年まで続いた。いわゆる征服王朝(金、元、清が続く)の最初とされる。(参考文献②より)

〈新羅の滅亡〉
後百済が王位継承争いで揺れていた935年、新羅のキョンスン王はもはや国の存続は困難と考え、高麗への投降を決意。それに反対していた太子は山の中で一生を終えた。
こうして1000年続いた新羅は滅亡した。(参考文献①P65)



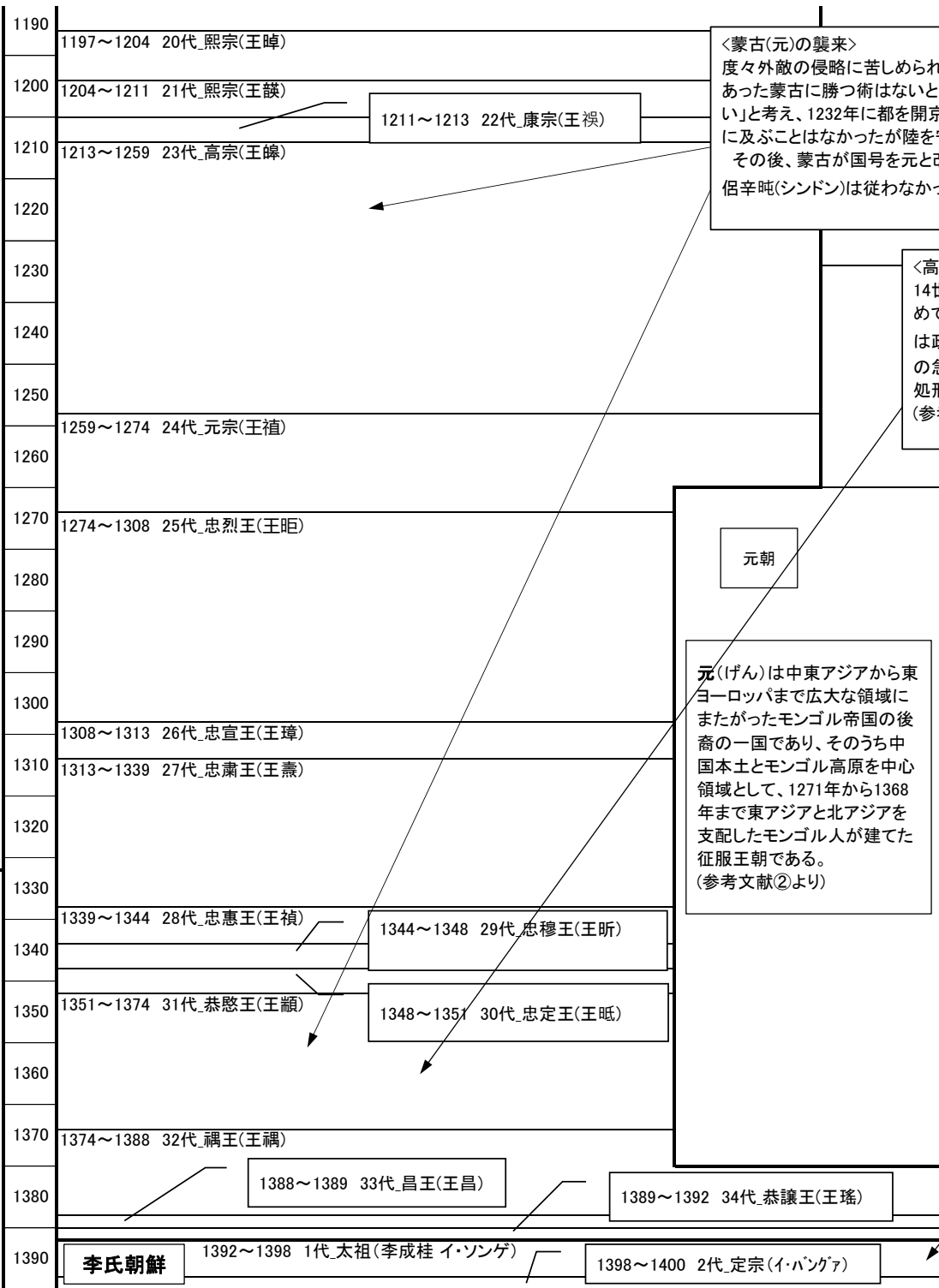
1192 源頼朝、
征夷大將軍に

鎌倉時代

1274 蒙古襲来

1338 足利尊氏、
京都開幕

室町時代



〈蒙古(元)の襲来〉
 度々外敵の侵略に苦しめられて高麗であったが1231年に中国大陸で勢力を増してきた蒙古が攻め込んできた。当時最強であった蒙古に勝つ術はないと判断して講和に持ち込んだが、以後蒙古から干渉を受けることになる。そんな中「蒙古は海に弱い」と考え、1232年に都を開京(ケギョン)から江華島(カンファド)に移して襲撃に備えた。それが的中し、蒙古の襲撃がカンファドに及ぶことはなかったが陸を守る民衆たちの怒りが爆発し、政権が崩壊。
 その後、蒙古が国号を元と改め、高麗に徹底した服従を求めたが反元政策を掲げた第31代王の恭愍(コンミン)と彼を支える僧侶辛旽(シンドン)は従わなかった。そのため国内の親元派から度々命を狙われた。(参考文献①P77)

〈高麗末期、シンドンの国政改革〉
 14世紀半ば、衰えつつあった元に代わって明が統一国家を築き始め、高麗に対しても領土割譲を求めてきた。国内親元派の反乱は収まりつつあったが1365年、王妃が出産中に死去してからコンミン王は政治への関心を失い、僧侶辛旽(シンドン)に国政を任せることになった。シンドンは奴婢の開放等の急激な改革を実施し、傾きかかった高麗を立て直そうとしたが、旧勢力の反発を買って排除され、処刑された。その後コンミン王も反対勢力によって暗殺される。
 (参考文献①P78)

元朝

元(げん)は中東アジアから東ヨーロッパまで広大な領域にまたがったモンゴル帝国の後裔の一国であり、そのうち中国本土とモンゴル高原を中心領域として、1271年から1368年まで東アジアと北アジアを支配したモンゴル人が建てた征服王朝である。
 (参考文献②より)

〈高麗の終焉と李氏朝鮮の建国〉
 李成桂(イ・ソンゲ)は高麗の將軍、李氏春(イ・ジャチュン)の次男として生まれた。若い頃から戦場を駆け巡り、1388年、32代_禑王の時代に明を攻撃する遼東征伐軍の司令官になったが明との戦いに反対だったソンゲは威化島(ウィファド)で引き返して(威化島回軍)、都に攻め入って高麗の最高実力者であったチュオンを倒して自ら最高権力者にのし上がった。
 その後高麗王を二度取り替え、34代_恭讓王を殺害し、自ら王座に就き太祖(テジョ)となった。こうして約500年続いた高麗時代が終わりを告げ、その後500年以上続く李氏朝鮮王朝が始まったのである。
 (参考文献①P85)



江戸時代	1610	1608~1623 15代_光海君(李暉 イ・ホン)	<p><韓ドラのホジュンはどんな人か> 朝鮮最高の名医と名高いホジュンは1539年、京畿道楊川県(現ソウル江西区)に庶子として生まれたと言われている。父親は龍川副守を務めた両班の家庭だったが、妻の子ということで身分の制約に苦しんだと思われる。内医院に入った後は次々と功績を上げて昇進を重ね、1606年、医官出身としては最も高い輔国崇祿大夫(正一品)に奉じられる。そんな名医としての名声もさることながら、ホジュンが残した最も偉大な業績は何と言っても「東医宝鑑」。1596年、第14代王_宣祖の命によって編纂が始まった「東医宝鑑」は、豊田秀吉による文禄慶長の役によって中断を余儀なくされると、宣祖はホジュン一人で編纂を続けるよう命じた。そして、宣祖崩御の責任を取って流罪に処せられながらも編纂を続け、ついに1610年、14年の歳月を経て25巻25冊を完成させた。こうして朝鮮医学の集大成を完成させたホジュンは、それから5年後の1615年、77歳でこの世を去った。</p>	
	1620	1623~1649 16代_仁祖(李倧 イ・ジョン)	<p><党派の争い> 朝鮮王朝を舞台にした韓ドラでも常に出てくる派閥争いの始まりは16世紀中頃、金孝元(キム・ヒョウウォン)と沈義謙(シム・ウギョム)という2大両班(ヤンバン)の個人的な対立である。金の屋敷が都の東にあったことから、金一派を東人(トンイン)、沈一派を西人(ソイン)と呼んだ。その後東人が南人(ナミン)と北人(プイン)に、また西人が老論(ノロン)と少論(ソロン)に分裂して互いに勢力争いを展開したことを四色党争(サシックダンジェン)と言った。 なかでもヨンジョの時代は党争が最も激しい時代であった。(参考文献①P159)</p>	
	1630			
	1640	1649~1659 17代_孝宗(李湊 イ・ホ)		
	1657 明暦の大火	1650	1659~1674 18代_顯宗(李胤 イ・ヨン)	<p><名君_第19代王_肅宗(スクチョン)> スクチョンは父顯宗(ヒョンジョン)の一人息子だったため父の死後13歳で即位。その時、宮廷は西人派と南人派の権力闘争の真最中だった。派閥争いは西人派の勝利で一旦決着したが、その西人派が更に老論派と少論派に分かれて権力闘争を繰り広げた。 そんな中、10代の王スクチョンは王という名の飾りの立場を受け入れ、積極的には動かず、そのためにどちらからも命を狙われることが無かった。 20歳を過ぎてから彼は政敵をけん制しながら一方の派閥に力が偏ると、他方の派閥を起用することでバランスを取り、派閥の対立心をあおりつつタイミングを見て転換することで自分への忠誠心を高めていった。 それを辛抱強く続けることで何代も続く権力争いで衰えていた王権を強化していった。 政治では、大同法で税制を、貨幣鑄造事業で経済を安定させ、また外交面では清との国境紛争の収拾、日本との交易等での功績を上げた。 こうして不安定だった朝鮮が落ち着きを見せスクチョンの治世は歴代の中で2番目に長い46年も続いた。 しかし彼の唯一の弱点は女性問題であり、朝鮮三大悪女の一人、張禧嬪(チャン・ヒビン)を王妃にするというミスをしたのである。(参考文献①P152)</p>
	1660	1674~1720 19代_肅宗(李焯 イ・スン)		
	1670	1680		
	1687 生類憐みの令	1690	1700	
	1710	1720~1724 20代_景宗(李昀 イ・ユン)	<p><朝鮮王朝三大悪女の一人_チャン・ヒビン> 張禧嬪(チャン・ヒビン)の実名は玉貞(オクチョン)。 賤民であったオクチョンは針番の女官として宮中に入った。第19代王_肅宗からの寵愛を受けたが明聖王后(肅宗の母)から快く思われなかったため、一旦は宮廷から追われた。当時の朝鮮では西人派と南人派の党派争いが展開されており、西人派が仁顯(イニョン)王后を後ろ盾に政権を握っていた。しかし仁顯王后は王妃に立てられてから6年を経て子供に恵まれなかった。そこに目をつけた莊烈大王王妃を始めとする南人派は1686年に美貌に秀でたオクチョンを再度、後宮に送りこみ、承恩尚宮(スンウンサングン)とした。オクチョンは淑媛(スグオン)、さらに昭儀(ソイ)へと昇進し、1688年には王子李昀(後の景宗)を生む。1689年にはその功勞によって側室の最上位の嬪(ピン)に昇進し「禧嬪(ヒビン)」と号され、李昀は世子となった。さらに同年、イニョン王后は廃され、1690年にヒビンが王妃となった。この朝鮮史上唯一の賤民出身の王妃の冊立によって西人派の専横に終止符が打たれたが、替って南人派が権力を握ることになった。一方、西人派ではイニョン王后の復位運動を展開。南人派の権力が増長することを危惧した肅宗が南人派牽制のためイニョン王后を妃に復位させ、ヒビンを王妃から「嬪」に格下げとした。1701年にイニョン王后が病没すると、西人派は王妃の死はヒビンが巫女を使って呪詛したためだと訴えた。その結果、1701年、ヒビンは肅宗から賜薬により処刑された(享年43歳)。</p>	
	1720	1724~1776 21代_英祖(ヨンジョ) (李昞 イ・クム)	<p><21代王_英祖(ヨンジョ)> ヨンジョは第19代王_肅宗(スクチョン)の次男として生まれ、実名は李昞(イ・クム)。母はドラマで有名になったトンイ(後の淑嬪崔氏スクピンチェシ)。 幼い頃から老論派と少論派の権力争いに巻き込まれて命の危険を感じてきたヨンジョは王になると少論派を追放して老論派を登用した。しかし彼は権力が一方に偏ると危険だと判断し、少論派を少しづつ入れながら両派の均衡を保った。同時に派閥内の婚姻を禁止し、有力者による私刑を禁止して派閥の動きを封じようとした。これが一部の臣下の反発を招き、彼らの陰謀により世継の莊献世子を米びつの中で餓死させるという悲劇を招いた。この背景にはヨンジョに反発した老論派と老論派出身の貞純王后の策略があったと言われている。後にヨンジョはこの行いを悔い、莊献世子を復位させて思悼(サド)という諡(おくり名)を与えた。 ヨンジョは厳しい政治を行う一方で、印刷技術を開発して庶民に書物を広め、教育制度を整備し、学問を奨励した聡明な王であった。また税制を改革して庶民の暮らしを豊かにしようと務め、後に王位を継いだ李祘(イ・サン)の代に多くの学者が誕生する下地を作った。 その結果、ヨンジョは歴代で最も長い52年の間王として君臨し、文化が花開く朝鮮王朝後期の礎を築いた。(参考文献①P158)</p>	
1730	1776~1800 22代_正祖(李祘 イ・サン)			
1740	1790			
1772 田沼意次老中に	1750	1800~1834 23代_純祖(李玢 イ・ゴン)	<p><22代_正祖(李祘イ・サン)> 21代王のヨンジョは冤罪で後継ぎの世子を死なせてしまったことを後悔し、その息子の李祘(イ・サン)を次の王と決めていた。ヨンジョが1776年に逝去し、22代王になったイサンは父の復讐を胸に秘めながらも取りかかったのは老論派に抵抗できる勢力を作ることだった。身分に関係なく能力があれば登用し、また優秀な人材を育てるため成均館(ソンギュンガン)等の学舎を支援して基盤を固め、老論派を弱体化させるための政治改革に着手した。身分が低くとも役人になれるようになり、イサンの知世は「朝鮮王朝のルネッサンス」と呼ばれるほど繁栄した。こうしてイサンはハングルを作った第4代王セジョンに並ぶ名君としてその名を称えられ、セジョンと同じく「大王」の称号が贈られた。しかし一方では古い体制を重んじる派閥の反発を招いた。王になる前から敵対勢力から命を狙われたイサンだったが、王になってからも暗殺者と戦わなければならなかった。(参考文献①P162)</p>	
1800 伊能忠敬蝦夷地測量	1800	1810		

